

令和4年度第2回長浜市総合教育会議議事要点録

I 日 時 令和5年1月31日(火曜日)13時30分～15時30分

II 場 所 長浜市役所3階 特別会議室

III 出席者 【構成員】

浅見 宣義 市長 織田 恭淳 教育長 前田 康一 委員

廣田 光前 委員 宮本 麻里 委員 中村 亜紀 委員

松宮 誠也 委員

【社会教育委員】

大橋 松行 委員長 川瀬 寛子 委員 松田 幸夫 委員

【事務局】 内藤教育部長、堤教育委員会事務局次長、東野教育委員会事務局次長、服部教育総務課長、中北教育改革推進室長、筧教育指導課長、山岡すこやか教育推進課長、中島幼児課長、前嶋教育総務課長代理、川瀬教育総務課主幹、三輪教育指導課主幹、福永総務部長、横田総務部政策監、森総務部次長、柴田政策デザイン課長、川瀬生涯学習文化課長、下司長浜図書館長、山崎政策デザイン課係長、平居生涯学習文化課係長、小野政策デザイン課副参事、池野政策デザイン課主査

IV 内 容

1 開会

2 市長挨拶

市 長

第2回長浜市総合教育会議の開催にあたりまして、一言ご挨拶申し上げます。

教育委員、社会教育委員の皆様におかれましては、日ごろから、子どもたちの教育の充実と発展、そして健全育成のために、大変なご尽力を賜っておりますこと、心から感謝申し上げます。

さて、本日の意見交換のテーマは、「地域と学校の連携と協働による「生きる力」の育成について」と、「子どもの読書の推進について」でございます。

現在、長浜市教育委員会では、「誰一人取り残さない長浜の教育の実現」を掲げ、全ての子どもたちが「真の学力」を身に付けることを目指して取り組んでいます。

「真の学力向上」のためには、子どもたち自身が、何が重要かを主体的に判断し、多様な人々と協働することで、新たな価値を創造していくと同時に、新たな問題の発見・解決につなげていくことができる能力である「生きる力」を身に付けることが必要です。

そのために、様々な経験をするのが重要となりますが、学校や家庭に加えて、地域の役割も大きく、学校と地域が連携しながら、子どもたちが様々な経験

をできる環境づくりが求められています。

また、都市部では、学校の自由化が進み、新しい学校が多く設立されていますが、地方の強みは地域との結びつきが強いことであると考えています。

今回の総合教育会議は、教育委員さんに加えて社会教育委員さんにもご参加いただき、地域と学校の連携や、子どもたちが読書をする機会を増やしていく今後の方向性などについて、ご意見をお聞きし、長浜の子どもたちの「生きる力」を、地域全体でより一層育んでいける環境づくりに取り組んでいければと考えております。

本日は、よろしくお願い申し上げます。

3 教育委員・社会教育委員紹介

4 趣旨説明

5 意見交換

テーマ①:「地域と学校の連携と協働による「生きる力」の育成について」

(1)意見交換1

行政説明 ・「生きる力」の育成のための、地域と学校の連携・協働の現状や課題について

委員 資料 P19 の、「学校を核とした地域力強化プラン市町別事業実施状況一覧表」で、他市と異なる状況になっている経緯や理由を教えてください。

事務局 この表を見ると、補助金事業が対応できていないが、本市としては、地域学校共同本部が設置される前の時点から、各地域で特色ある活動を行ったり、地域に根差した活動を展開してきた。現在も、コミュニティ・スクールの委員が地域と学校をつなげたり、教員が地域との関係づくりを行っており、今後も続けていきたい。

委員 基本的には学校単位で任せているということでもいいか。

事務局 学校単位で行っているところも多いが、例えば北中学校、北小学校、神照小学校間で行っている「夢プロジェクト」等、地域で行っているものもある。

教育長 資料 P19 を見ると、確かに長浜だけ記載がないという印象を受けた。アドバイザーという立場から見ると、このような組織本部をつくったほうが効果的だと思うか。

また、事業がいくつかあるが、それらを簡単に教えていただきたい。

また、長浜の現状を踏まえたうえで、長浜にはどれが有効かといったアドバイスもいただけるとありがたい。

委員 地域学校協働活動推進事業としては、地域にコーディネーターを配置することが多いが、長浜の場合は、学校の中にコーディネーターを配置し、それを教頭や

教務主任が担うケースが多い。

他市町の事例では、元教員・教職員の方が地域のコーディネーターとなり、中学校区を一つの管理単位として、その方が学校に地域の意見を伝え、学校側はその人に依頼をするという連携をされている。

長浜は、コミュニティ・スクールを設置する以前から、コーディネーターを配置して取り組んでいたが、コミュニティ・スクールを一括で導入した際に、地域と学校との結びつきが学校主導にある風潮になっていると感じる。

事業の内容については、「地域未来塾」は、中学生を対象に、地域住民の協力による学習支援を実施しているもので、「放課後子ども教室」は小学生も含めて地域住民の協力による学習支援や体験活動を支援するもの、「土曜日の教育支援」は、土曜学び座として実施しているものである。

長浜にとって一番効果的なものとしては、地域学校共同本部のコーディネーターの役割でないかと感じている。

委員 コミュニティ・スクールは、どこに設置されているのか、学校にあるのか。
また、表では「放課後子ども教室」に本市の記載がないが、これは現在実施している放課後児童クラブと同意ではないのか。放課後児童クラブとの違いは何か。

事務局 資料 P10 に記載しているが、コミュニティ・スクールの概要で、各学校に学校運営協議会を設置しており、学校運営協議会を設置している学校＝コミュニティ・スクールである。

放課後児童クラブと放課後子ども教室は、長浜は同じような取組ではあるが、所管課が市長部局と教育委員会とで異なるというものである。

委員 合併前の湖北町では、地域学校共同本部ボランティアとして地域の人が参加することに重点を置いて活動していた。そのため、合併時には、各地域にある教育材料や魅力を生かして、学校と地域が共に学びあえるような場を創っていくような活動をしていくために、これまでの取組を生かしながらコミュニティ・スクールを考えていこうとなった。

そのように、地域によって様々な特徴があり、コミュニティ・スクールに承認されるか同課ではなく、ボランティア活動^{イコール}＝コミュニティ・スクールだと考えてやっていた。

そのため、コミュニティ・スクールの本当の趣旨が徹底されているかと言えば、私は少し疑問に思う。

その中に、コーディネーターが不在となると地域と学校との結びつきをどうしていくか混乱が生じると思う。

地域によって、昔からの取組が現在も続いているところや、夢プロジェクトのように新しいものを試行錯誤しながら実施されているところがあり、コミュニテ

ィ・スクールかどうかで動いているわけではないと感じる。

このように、スタートのやり方が地域によって様々である中で、それを今、機能がしっかりしているか等の見直しや、コーディネーターを入れて整理するのであれば、良い機会ではないかと思う。

事務局 学校の窓口として、現状は不特定多数の職員が行っている。校務分掌上では地域連携教職員という位置付けがあるが、例えば、その担当教員が授業中であればその間は地域の方と連絡がつかないなどの課題があり、教職員の働き方改革にも繋がらない。

そのため、コーディネーターを配置して、そのコーディネーターが学校運営協議会に入ることによって学校と地域をうまく結びつけている事例を他市町でも聞くので、長浜でもそのようなことができればと思う。

委員 今回の長浜は管理職の先生が地域と学校の窓口になっている体制だが、2.3年で人事異動があるため、新任の先生はまた1から地域との人間関係を構築していかなければならない。

今後、継続的にコミュニティ・スクール制度を発展させていくなら、コミュニティ・スクールの中心として継続的に関わる人がいないといけない。

地域の中からそのような人を選ぶことで、より地域に詳しいだけでなく、引越しの心配も少なく、先生の異動があっても地域との関係は変わることなく進めることができる。また、任された人は自身が持つアイデア等の提案がしやすくなるのではないか。

教育長 北中学校の校長をしていた際に、北中学区で行っている夢プロジェクトに関わっていた。夢プロジェクトのコンセプトは「地域の子供は地域で育てる」というまさにコミュニティ・スクールの理念に似ているものである。その組織の中には、中心となる人がおられ、何かあったらその人に連絡をして、そこから組織を動かすという体制ができていた。

しかし、校長として思うことは、もう一步踏み込んで、学校や地域、生徒が持つ課題等、それらを一緒に考えたかったと感じる。もちろん当時そのような意見も伝えており、委員の方からもいつでも言っているとされていたが、中々その問題に踏み込めなかった。

その理由としては、生徒指導の面で絡んでくる個人情報の面や、教職員の人事に関することについて話してもいいのか、そこまで踏み込んでいいのかという問題があったからである。しかし、これらのことについて話していかないと、教育課題の解決に向かっていくことは困難であると感じている。

委員 先日、湯田小学校の学校訪問をさせていただき、湯田小フェスタのお話を聞いて

た。

それは、地域と共に子どものキャリア教育をするというもので、地域の人が学校に来て自身の生き方を説明したり、ブースごとに様々な取組を紹介されていた。それには学校運営協議会等、地域のあらゆる組織が関わっており、その中にコーディネーターの人がおられるとフェスタとしても大きな意味があると感じ、このような地域の子どもを育てるということをカリキュラム化し、教育過程に乗せていくことが重要であると感じている。

先ほど教育長も仰っていた、「地域の子どもは地域で育てる」という地域の思いを集めて形にしていくことが、湯田小ではフェスタ、北中学区では夢プロとして実施されているが、単発的な行事で終わるのではなく、それを教育過程の中に位置づけて、長期的に実施していくということを考えていく必要がある。

そのためには、地域の中にコーディネーターを配置し、関係個所との連携を図りながら動いていくシステムがあればよいと思う。

前回の会議で高校の話が出たが、地域の子どもを地域で育てていくには小学校や中学校だけでなく、高校も含めた長浜全体の教育という視点で、何をしてどうしていくかを考えていくことが重要であると考えます。

事務局 取組事例等をご紹介いただいて、地域と学校の連携の中で地域コーディネーターの役割の重要性をお話いただいた。コーディネーターが中心となって幅広い地域住民の参画が課題となっているように感じるが、その部分について何か意見はあるか。

委員 コーディネーターになる人のホームグラウンドかどうかは課題かと思う。
例えば自身がよく知っている地域であれば地域と学校を繋ぐ役割もしやすいが、関わりのない地域でそれをやってほしいといわれても限界がある。
やはり、地元の中で、様々な関わりをもって来られた方、追加でいえば教育部門に関わりがある方であれば、より学校の動きもわかって効果的に動けるのではないかと思う。

委員 コミュニティ・スクールの「成功」とは、どのような状態にあることか。
そこが定まっていないと、各校の目指すところもバラバラになってしまう可能性もある。行政から見る「成功」とはどのようなものか。

事務局 行政としては、資料 P4 の体制イメージにあるように、地域と学校が一緒になって、どのような子どもを育てていくのかといった目標やビジョンを共有することが重要であると考えている。

また、問い合わせの窓口を明確化して、地域と学校をしっかりと繋ぐことのできるコーディネーターを配置する体制の仕組みを構築していきたい。

その窓口はどこがなっていくかということについては、まちづくりセンターがふさわしいのではと考えている。理由としては、現在、まちづくりセンターは指定管理として地域づくり協議会の方々に管理をいただいております、地域づくり協議会は各種団体がしっかり集まって、地域の課題解決に向けての体制をしっかり組んでおられるためである。

また、コーディネーターは社会教育法で位置付けられている地域学校共同活動推進員の制度があり、それを活用すると教育委員会からの委嘱が必要になるため、より教育委員会と関わりが持ちやすく、個人情報等の問題も管理がしやすいのではないかと考えている。

窓口を明確にし、目標やビジョンを共有して、新しい事業を協働で進めていくよりは、既存事業についてしっかりと検証した中で連携できることは無いかを考えていくという話し合いから進めていけるようになると、一定の仕組みや体制づくりができるのではと考えている。

委員 目標やビジョンを共有することは一番大事なポイントであると考えている。その部分について、教育カリキュラムの中に明示できるのではないかと。明示できると、何をコーディネーターに任せるのかといった明確な指示ができ、学校として1年間のカリキュラムの中でここは一緒にする、ここはコーディネーターに任せるといった流れができることで、今後も継続していきやすいと思う。

委員 現在、小学校に読み聞かせのボランティアを行っているが、資料 P4 で自身はどこに分類されるのか、今現在もコミュニティー・スクールの一員なのか不明確のまま活動を行っている。

また、学校側が異動で体制が変わると、地域との関わりに対する熱心さも変わってしまう。しかし、読み聞かせ活動は何とか継続していきたいという気持ちで取り組んでいる。

委員 学校に関わっている地域の人は、お孫さんがいたり、元々学校と何らかの関わりがある人が多く、普段学校と関わりのない人には情報が届きにくいのではないかと。その人たちに関わってもらうには、コーディネーターの役割が重要だと感じた。

目標やビジョンの共有の部分では、保護者も含めて地域をどうしていくか話し合うことが重要であると思う。例えば、子どもたちと保護者、地域の人と一緒に話し合うことで、今後の学校のことを様々な視点で話すことができる。

また、子どもが参加できる魅力的な講座等がよく開催されているが、比較的同じ子たちが参加していて、より多くの子どもや保護者に広がるよう、情報の共有や発信に注力できると良い。

委員 地域学校共同本部の話の中で、プラスの面だけでなく、ヤングケアラーや少年非行等の課題の面についても踏まえながら考えないといけないと感じる。

資料 P19 に、家庭教育支援活動の記載があるが、長浜市は記載がないため、是非この活動も行っていただきたい。子どもたちを育てるのは地域だというのが、基本は家庭である。ヤングケアラー等については、家庭が不安定であったり、保護者への支援が必要であったりするため、そこを支援する組織や地域が必要ではないか。こういった問題は中々学校には相談しづらいこともあるので、その相談の場、そのような事例に気づくことのできる地域になればいいと思う。

非行問題についても、やはり家庭の問題が大きい。保護者を変えていくには様々なアドバイザー等を通じて長い時間をかけることも必要で、学校だけでは把握できない部分については、地域の方々の力もお借りしながら対策を考えていければと思う。

市長 家庭の問題と子どもの問題が密接に関係していることは前職の経験からも感じており、プライバシー等の課題はあるが、そういった家庭を地域で支えることも必要であると思う。そのために、コーディネーターの方々の存在は大きいと感じている。

委員 10年以上前から地域と学校の抱える課題が変わっていないと感じた。その時も、学校の先生は異動があるため、地域に担当の人がいないといけないという話が上がったが、PTA 会長が地域と繋ぐ役割を担うため、担当はつけなくても良いということであった。

しかし、資料 P19 を見ると、長浜市が空欄の部分が多く、機能的には上手くいっているのかもしれないが、取り組んでいることが伝わっていない可能性もあると感じる。先ほどの話にもあったが、ビジョンや目標が明確になっていないため、何のためにやっているのか、自己満足で終わっているのではないかという懸念があるため、しっかりとビジョンや目標を持つべきである。

また、学校の情報が地域へ伝わっていない事例として、休校の連絡が、保護者には伝わっていても、通学路の見守りをされている地域の方々には知らされていないことがあった。このようなことが無いよう、一方通行でもいいので、地域の人に情報を伝えるべきであると感じる。

また、家庭等で抱えるマイナスの面については、地域の人だからこそ気づけることもあると思うので、その問題にどこまで地域が入っていいのかを位置づけないと、機能としては上手くいかないのではないかと。

教 育 長 子どもたちが身に着けるべき力は、学力だけでは無いということが注目されている。

「人は、人を浴びて人になる」という言葉があるが、様々な人と出会い、失敗や成功、嬉しいことや悲しいことなど、もみ合いながら成長していくことが重要で、特に幼少期にその環境を、学校や地域としていかに作っていくかが鍵である。

しかし、現在の本市の状況は、どのような子供を育てるかといったベクトルが定まっていないように感じるので、各学校と地域と一緒に考えながら、真の学力向上に向けて取り組んでいきたい。

テーマ②:「子どもの読書の推進について」

(2)意見交換2

行 政 説 明 ・学校現場における読書活動の現状について

・長浜市立図書館の子ども読書活動推進事業について

委 員 員 資料P23,24の結果から、子どもたちの不読率の高さに驚いている。特に、学校で朝読書の時間があると思うが、年間で1冊も本を読まない子どもがこんなにいることは正直信じられない。

私は本の読み聞かせ活動をしているが、実際に幼少期に本を読んでもらった経験がない、家に本が全くないという環境の子どもたちがいる。その子たちは、例えば中学生でも、誰もが知っているような昔話を紙芝居で読むと、お話を聞くことの心地よさに引き込まれ、喜んでもらえることもある。

現在、長浜ではブックスタート事業もあり、少しでも本に触れられる環境を創っておられるが、本を読み聞かせることも、お話し会に参加することも、興味関心がないとできない。特にお話し会はコロナ禍で参加をためらわれている方もおられると思うので、私たちとしては、本に少しでも興味を持ち、本を少しでも読んでもらえるように、昔話や物語だけでない本も紹介しながら、本の楽しさ、幅広さを伝えていきたい。

委 員 員 子どもたちが本を読まない理由については、どのように分析されているか

事 務 局 先生たちも、学校図書館との連携や、ボランティアの方々のご協力も得ながら、読書の機会を意識して作っている。

しかし、朝の時間に読書をする機会が多いため、朝に教室にいない、別室にいる子たちは学校で本を読む機会に触れられないこともある。

また、今後、システム面での業務改善も行いながら、本の魅力を伝えていきたいと考えている。

委 員 員 読書をするかどうかは、家庭的な理由も大きいのではないかと感じる。資料P34に今後の案が示されているが、デジタルになじみのある子どもたちにとってはいいかもしれないが、この案そのものが不読を解消するものではないのではないかと感じる。また、資料P33の結果から、読書が好きな児童ほど正答率が高い結

果がおおよそ納得できるが、その逆もあり、字が読めない、漢字が読めないから本も読まない、読めないという傾向もあるのではないか。

また、中学生向けの推薦図書としては、どのような本があげられるのか。

事務局 推薦図書については、基本的には学校単位でお願いしており、学校の規模や現状に応じて異なるが、図書の先生を中心に会議等を開いて購入いただいている。

委員 推薦図書は、「これぐらいのレベルの本を読んでもほしい」という、年齢に合った本が推薦されているかと思うが、本を読まない子や本が苦手な子に対してはレベルが高く、より本に関わりにくくなってしまおうと思うので、例えば中学生であっても絵本を推薦してもいいのではないか。

本に触れてもらうことが第一の目的とするならば、単に絵だけではない、少し文章も入った漫画のようなものや、大人向けの絵本を推薦することで、読書に対するハードルが下がり、本を手に取りやすいのではないか。

委員 家に新聞が無い家庭が増え、何でもスマートフォン等で検索するような、社会全体でデジタル化が進んでいる時代になった中で、紙の本を読むという価値を子どもたちにどうアプローチしていくのか。図書館や学校教育の場でも、この状況にどのような対応策を考えておられるのかお伺いしたい。

事務局 子どもが自分の意思で、目の前にある本を読む、1冊の本を読み切ることは、かなりエネルギーのいることである。例えば、大人でも、1か月に1冊の本を読み切ったかと問われたら読んでいない人も多く、大人が読書を楽しんだり、活字を読んでいる様子を見るのが少ない環境になってきている。

図書館には、本に関心のある人が来館されるが、1年間に1冊以上本を借りられた人の割合は年々減少傾向にあり、現在は市民の12%ほどである。そのため、紙だけでなく、電子書籍も視野に入れながら、大人が子どもに日々の生活の中で自然に本を勧められるような、子どもが自然に本に興味を持てるような環境づくりを、図書館だけでなく、学校とも協力しながら検討していくことが必要であると考えている。

委員 子どもへの読み聞かせについて周囲の保護者から意見を聞く中で、小学校入学前は親の責任として一生懸命行っていたが、小学校に入ると仕事の都合もあり、読み聞かせの時間があまり取れなくなってしまうという意見が多くあった。

子どもが本を読むことが重要であることは保護者も理解しているが、「〇歳におすすめ」とわかりやすく書いてあるもの以外は何を選んでいいのかわからない。図書館に行きたくても、休日は習い事等であまり時間が取れないため、どんな本がおすすめかの情報提供を保護者に向けても行ってほしいとの意見もあった。

また、学校で本を読んでも家に持って帰らず、学校で読むことが主となっているため、家に本が無い傾向にあるのではないかと。

また、昨今の物価高騰で、本にお金をあまりかけられないことも現状であると感じている。そのため、保護者も子どもも、気軽に本に関わることができる機会を創っていくことや、本を読む意義を伝えていくことが必要ではないかと。

委員 資料 P22 の滋賀県子どもの読書活動に関する調査の概要について、調査内容に「教科書、学習参考書、マンガ、雑誌やふろくは除く」とあるが、この注意書きによって子どもたちが、自分が読んでいるものをカウントしていいのか迷ってしまうのではないかと印象を受けた。例えば、学校での調査時に、先生がこれは含まれる、これは含まれないといった回答のサポートを行っているのか。

また、学校図書館のデジタル化が進むことで、他校の蔵書検索や他校とのやり取りができるという説明があったが、実際それが実現できる可能性はあるのか。

事務局 回答の教員のサポートについては、各学校、教員に任せている部分があるため、実際の状況についてはわかりかねる。

デジタル化については現時点では検討段階であり、各校の貸し出し状況等の聞き取りを行ったり、他市の事例を調査しながら考えていきたい。

生徒に配布している端末を活用しながら、他校との連携が進むことを目指して検討していく。

委員 昨今のデジタル化が急激に普及していることで読書数が減るのではと考えていたが、資料 P25～28 の不読率や平均読書冊数を見ると、ほぼ横ばいの傾向にあることがわかる。

また、この調査の中で、読書率とテストの点数の関係性などの分析はされているか。

加えて、本を読まない子はなぜ読まないのか。習い事で時間がないとか、読書よりゲームをしているとか、その調査はされていないのか。

事務局 この調査に関しては、「何冊読んだか」に限られるため、不読の原因等の調査は行っていない。

また、読書と成績の関係については、読書以外の様々な要因が重なって成績に表れてくるため一概には言えないが、この部分の検証は必要であると考えている。

委員 デジタル化が進む中でも、本や紙にしかない良さも多くある。子どもたちにも、その良さを感じてもらって、紙の本に触れる機会が増えると良い。

委員 先ほど出た意見の中で、どのような本を読めばいいのかわからないという意見があったが、図書館では、「おはなしのたからばこ」という小中学校に向けた学級巡回文庫の活動をされている。

そこには、司書の方々の工夫のもと、年齢に応じた様々な種類の本が届けられており、例えば中学生に向けては、将来を考えるようなもの、勉強の息抜きに読めるもの、昔話や絵本など、様々なジャンルのものがあった。

しかし、それは学校にしかないのもので、家庭にまではなかなか伝わりにくいと思う。

また、司書さんがおられることはとても重要で、ある学校では、これまでは先生が図書館の本の管理をされていたが、司書さんが来られるようになってから、図書館の展示方法がガラッと変わって、子どもたちが読みたくなるような工夫がされていた。

しかし、司書さんも限られた時間の中で取り組んでいただいているので、今後、各校のネットワークの構築や横の連携ができるのか心配する部分もある。

現在取り組まれていることはいいことであると思っているので、その取り組みが少しずつでも子どもたちに伝わり、その成果が見えてくることに期待している。

委員 資料 P34 の「読書活動のこれから」の部分に、学校図書館間での連携や市立図書館との連携強化、大学との連携といった記載があるが、地域との関わりへとしては、子どもたちに身近な場でもある、まちづくりセンターを活用してはどうか。

また、資源ごみの収集所で子ども向けの絵本が出されていることがよくあり、非常にもったいないと感じているため、各家庭で不要になった本をまちづくりセンターに寄付してもらって、その本を子どもたちに読んでもらうことで、施設の蔵書数も増やし、子どもたちも様々な本に触れることができるのではないかと。

子どもたちが本に触れあえる拠点にまちづくりセンターがなればよいと思う。

また、地域との連携として、教員のOBの方など、地域のボランティアの方々のお力をお借りして活動を広げていくのもいいのではないかと。

委員 資料 P36 の今後の課題に、「未就園児のいる家庭への読み聞かせの重要性の啓発不足」とあるが、私は民間の子育て支援センターに関わっており、そこで保護者の方々のお話を聞くなかで、子どもへの読み聞かせを「やらないといけない」と脅迫観念に近い形で思っておられる保護者の方も多く、しっかり膝の上に座らせて最後までしっかり読むことが重要という風に思われている方も多いように感じている。

未就園児くらいの小さいお子さんは、本を読むというよりは、表紙を開いて、閉じての繰り返しであったり、1冊出しては片づけてまた1冊出すというように、おもちゃの1つとして親しむことでいいと思うので、市で実施されているブックスタート事業の際にでも、その部分の啓発もして行けたらと思う。

本を読む環境を作るという面では、やはり大人がデジタルで情報を得ている現代であるからこそ、大人が紙の本を読んでいる姿を子どもに見せるだけでも、子どもに与える影響はあると考えている。

委員 私自身、貧困のご家庭に訪問させていただく機会もあり、家庭に1冊も本がない、今まで家で本を読んだことが無い子どもがいるということを実感している。

その家庭では、園や学校の本が唯一の本であり、それを家に持って帰ってきて一緒に読むととても喜んでくれ、学校での読み聞かせも楽しみにされているとのことであった。

単に本を読むことだけではなく、本を通じて大人と一緒に時間を過ごしたり、大人と本を通じて関わるのが子どもたちにとって重要で、将来の力になっていると感じているので、日々の大人の方々の活動がとてもありがたいと思っている。

市長 個人的には、紙の本でも電子書籍でも、子どもたちに良質な情報を届けることが重要であると考えている。良質な情報がきちんと本人に与えられることで、本人がその情報を読み説いたり、理解し、幼少期からの人格形成に繋げていくことが一番ポイントだと思っている。

幼少期からの読み聞かせについては、脅迫観念になってはいけませんが、保護者の温もりを感じながら、保護者に本を読んでもらうことは、子どもたちにとって情緒の安定や、愛着形成、大人になってからも心に残る経験であると思う。

また、学生の時に読んでいた本で、大人になってから、あれはいい本だったと感じることもある。学校の推薦図書や「おはなしのたからばこ」も司書の方が一生懸命考えて、良質なものを子どもに伝えようとしているので、そういうものを活用しながら、引き続き子どもたちに本の良さを伝えていきたい。

また、教科書や受験問題に掲載されている文章は、いい文章が多い。

なぜなら、先生たちが限られた試験時間の中でも、いい文章に触れてほしいと考えて選んでいるからである。

このような様々な場面において、大人が子どもに本の良さ、文章の良さを伝えるという努力を継続していくことが大事ではないか。

教育長 本日は皆さん貴重なご意見をありがとうございました。

学校図書館の中には、パソコンがない、Wi-Fi の整備や本の入れ替えができていない、司書が配置できていないなど、様々な課題があるなかで、いかに子どもたちにとって良い環境を整えられるかが私たち大人の役割である。

最近では、「親ガチャ」という言葉もあるほど、経済格差が子どもの教育格差などの負を生み出していると言われていたが、最終的には子どもたちがどれだけ生きる力をつけ、その負の連鎖を断ち切れるかが重要で、そのためには私たち大人が子どもたちにどのようにその力をつけてあげられるか、周りの大人がどれだけ関わられるかにかかっていると考えている。

本日の会議で出た様々なご意見については、何か1つでも形にして、子どもたちに返していきたい。

6 その他 事務局

今年度の総合教育会議はこれにて終了。

7 閉会

以上